

それでも1960年代までは先進資本主義諸国において、ケインズ理論の政策論的有効性が大きな信頼を勝ち取っていたが、1971年のブレトンウッズ体制の崩壊、1970年代の石油危機によるスタグフレーションによってその権威は失墜し、ケインズの政策を無効ないし有害だとする見解が学会でも政策当局でも勢力を占めることになった。ところが2008年の金融恐慌が起きると、再びケインズ復活の話が聞かれるようになったが、前述のようにもともとケインズ経済学は、歴史的現実的前提条件が変化すると理論モデルの構成も変化せざるをえないという性格のものであったから、現時点でケインズの政策を援用すべきかどうかについては議論が分かれている。新しい状況にあわせて新しい解決法を模索すべきであるという意見も強い。この意味でケインズ的な思考方法は、「永久革命」だと共著者は言う²⁸⁾。その際、模索されるべき新しい解決の方法は、狭隘化した経済理論を、先述来の道徳哲学や政治学や社会学と連絡させ、さらに国際関係の変化を抑えた歴史の土台の上に経済学の対象領域を広げ、そうすることによって経済学の現実性を回復することであると共著者は主張しているが、私もこの点では共著者に賛同する。

この点についての議論は、BackhouseがP. Fontainと刊行した編著 *The Unsocial Social Science? Economics and Neighboring Disciplines since 1945*, (2010) の「序文」で、いっそう具体的に説明されている。その要旨は以下のとおりである；——① Donald Winch は、18世紀の古典派経済学が社会科学の他の分野との密接な関連をもっていた、その姿を描いているが、1945年以後の経済学は様相を一変して、シュンペーター等々の例外がないわけではないが、数学的=科学的という考えに基づいて、いくつかの経済理論モデルの数学的精密化に努力してきた。② 第2次世界大戦中には、経済学者に対して自国および敵国の経済計測が要請され、そのため経済学者による経済計測技術も発展した。サムエルソンが言うように第2次大戦は「経済学者の戦争」の観を呈したほどだ。この大戦が経済学史の(上記の)転換の「分かれ目」になった。③ 他方大戦中も冷戦時代にも心理学、社会学、政治学、自然科学を総合してソヴィエト体制を分析する必要から、各分野の協力による総合的分析も進んだ。しかし経済学と他の分野との総合は必ずしもうまくいっていない。④ 経済学は数学的に発展した。他方、心理学や社会学や政治学は必ずしもそうではない。経済学が基礎とする心理は、複雑多彩な人間のさまざまな心理から合理的な極大利益の追求という一面だけを切り離しており、それを基礎に数学的な論理を立てているが、心理学や社会学で論じる心理は複雑、多様であり不合理性を含む。⑤ したがって経済学と心理学や社会学との連絡はうまくいかなかった。⑥ しかし現在では経済学を他の分野と関連させることが必要である。そうしないと経済学と現実との食い違いは埋まらないだろう——。

28) Backhouse & Bateman, *op. cit.*, 第6章の標題。

本書における共著者の見解は、以上に見た見解と大方重なるように考えられる。これに対する私の現時点での感想は、以下のとおりである。

経済学と心理学や社会学や政治学との関連を考慮して社会科学的な経済学の再建を目指すという共著者の結論の趣旨には私もまったく賛成だ。しかしすでに形式的になった経済理論に人間心理の多面性や社会学の総合性をどのように取り入れることができるのか、このことにはむずかしい問題がある。主流派の経済理論が諸個人の合理的な最大利益追求を、唯一の心理的基礎として構想されている以上、いわゆる経済合理性からみれば不合理で複雑な心理を踏まえた心理学や社会学や政治学と経済理論を総合して社会学的な経済学を再建しようとしても、直ちに実りある成果の見通しが開けるようにも思えない。このような総合化は歴史の変動を基盤として押さえることによって可能なのではないかと考えられる。というのも歴史分析はもともと、社会科学の諸分野の総合的な関連づけなしには実行されないものであり、また歴史は、社会諸科学が対象とするさまざまな要素の相互作用と総合によって変動しているものであり、それゆえに個々の社会科学のほかの分野との関連は、総合的な歴史分析の中に、あるいはそれを基盤として求められるであろうからである。

共著者も、経済学を形式的に心理学や社会学と総合しようとしているのではなく、現実のさまざまな要素を含む歴史的变化との関連で経済理論の変化が規定されてきたという認識を本書において繰り返している。先述したことだが、共著者は、1919年の『平和の経済的結果』の歴史分析をケインズ経済学の出発点だと見なしている。ケインズが不確実性を『一般理論』に取り入れるようになったのも、1920年代の不況や1930年代の大恐慌という歴史上の変化が影響したと考えられている。第2次大戦後経済理論が政策技術的・数学的になった理由の大半も戦時中や戦後の体制対立から生じた自国および相手国の経済計算の必要性から説明している。前述のようにそもそも『一般理論』が政府介入的な政策理論として成立したのも、自由放任主義の終焉、労働組合、金本位制の崩壊、先進諸国の為替引き下げ競争、植民地拡張競争、資本の国外逃避、失業の増大というような歴史的事情抜きには考えられない。彼の経済理論は、こうした歴史的な事情を踏まえたうえでのクローズド・システムであるにほかならない。その生誕の由来もその政策の先進諸国にとっての有効性もこの歴史的事情によって左右されるはずである。ケインズはこのことをよく理解したうえで、すなわち歴史的事情に左右される相対性をもった理論として、すなわち、現実の前提事情が変化すると理論の構想も結論も変化するという相対性を自覚したうえで、『一般理論』を世に出しただろうこともまた前述したところである。

共著者は本書最終章の始めの部分で、最近のグローバルな状況のもとでのケインズ援用の問題に触れている。若干私自身の言葉をはさむことにするが、冷戦も植民地体制もなくなり、先進諸国の過剰生産力と遊休資金の累積を背景に資本と技術が新興諸国に移転してお

り、グローバルな自由競争市場が広がっている。(中国の対米債権問題は別として)。このような歴史的状況のもとで、利率はリキディティ・トラップの様相を深めており、また貨幣供給量を増やしても保険料の積立金を含む遊休資金の投機資金化(Financialization)や資本の国外流出を惹き起してその効果を減殺するだろうし、先進諸国ではすでに巨額の公債が累積されているから財政出動も難しい。だから労働者の貨幣賃金や社会福祉費を削るといのは、共著者の立場から言ってもケインズの道徳哲学(むしろ政治思想的な立場)から言っても受け入れられないであろう。他方、新興国にとっては賃金が低いだけにかえって有利になるだろう。

このような歴史的事情のもとで、クローズド・システムの枠組み内部で、財政・金融政策の効果を、短期と長期に分けて追求しても、必ずしもその結果が現実的であるとは期待できないであろう。財政政策や金融政策をどうするかを論じる以上に、グローバルな構造の歴史的変動を分析し、グローバルな諸条件と国内政策とのバランスを考える方策が、大きな意味をもっているであろう。その上で、『一般理論』の理論というよりも、歴史と国際関係を踏まえたケインズの心意気をどう生かすかを考えなければならぬと、バックハウスとベイトマンは主張している。先進諸国の経済成果は、かつてケインズが空想した「我が孫たちの経済的可能性」の実現形態に相当するであろう。彼の心意気から言えば、先進諸国は経済成長一本やりで雇用問題を考えるだけではなく、文化生活や社会福祉の充実に人手が行きわたる方策を考える方が、むしろケインズの道徳論的な期待に沿っているだろう。この判断は歴史的事情が変われば、それに応じて変わらざるをえないのであろうから、両著者はそれを permanent revolution と呼んでいるのである。私どものおかれた実情としては、私はこれに反対しなければならない理由をもたない。

参考文献

- 高木亮(2001)「フランク・ナイトにおける企業者と競争的経済秩序」『経済学史学会年報』第40号所収。
- 宮崎儀一・伊東光晴(1961)『ケインズ一般理論』日本評論社。
- 和田重司(2010)『資本主義観の経済思想史』中央大学出版部。
- Backhouse, R. E. (1985), *A History of Modern Economic Analysis*, B. Blackwell.
- (1994), *Economists and the Economy, The Evolution of Economic Ideas*, 2nd ed. Transaction Publishers.
- (1995), *Interpreting Macroeconomics: Explorations in the History of Macroeconomic Thought*, Routledge.
- (2010), *The Puzzle of Modern Economics*, Cambridge Univ. Press.
- Backhouse, R. E. ed. (1999), *Keynes: Contemporary Responses to the General Theory*, Thoemmes.
- Backhouse, R. E. and B. W. Bateman ed. (2006), *The Cambridge Companion to Keynes*, Cambridge Univ. Press.

- Backhouse, R. E. and P. Fontaine ed. (2010), *The Unsocial Social Science?: Economics and Neighboring Disciplines since 1945*, Duke Univ. Press.
- Backhouse, R. E. and T. Nishizawa ed. (2010), *No Wealth but Life: Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945*, Cambridge Univ. Press.
- Backhouse, R. E. and B. W. Bateman (2011), *Capitalist Revolutionary, John Maynard Keynes*, Harvard Univ. Press.
- Bateman, B. W. (1996), *Keynes's Uncertain Revolution*, Univ. of Michigan Press.
- Bateman, B. W. and J. B. Davis ed. (1991), *Keynes and Philosophy*, E. Elgar.
- Bateman, B. W., T. Hirai and M. C. Marcuzzo ed. (2010), *The Return to Keynes*, Harvard Univ. Press.
- Forget, E. L. (1999), *The Social Economics of Leon Baptist Say; Market and Virtue*, Routledge.
- Harrod, R. F. (1937), Mr. Keynes and Traditional Theory, *Econometrica*, vol. 5.
- Hicks, J. R. (1937), Mr. Keynes and the "Classics"; A Suggested Interpretation, *Econometrica*, vol. 5.
- Hutt, W. H. (1974), *A Rehabilitation of Say's Law*, Ohio Univ. Press.
- Kates, S. (1998), *Say's Law and Keynesian Revolution*, Edgar Elgar.
- (2011), *Free Market Economics*, Edgar Elgar.
- Kates, S. and J. C. Wood ed. (2000), *Jean-Baptist Say: Critical Assessments of Leading Economists*, Routledge.
- Kates, S. ed. (2010), *Macroeconomic Theory and its Failings; Alternative Perspectives on the Global Financial Crisis*, Edgar Elgar.
- Keynes, J. M. (1919), *The Economic Consequences of The Peace*, in *The Collected Writings*, vol. II. Macmillan, 1971 (早坂忠訳 (1977) 『平和の経済的帰結』 東洋経済新報社).
- (1921), *Treatise on Probability*, in *The Collected Writings*, vol. VIII, Macmillan, 1973 (佐藤隆三訳 (2010) 『確率論』 東京経済新報社).
- (1924), Alfred Marshall, in *The Collected Writings*, vol. X, Macmillan, 1972 (大野忠男訳 (1980) 『人物評伝』 東洋経済新報社).
- (1936), *The General Theory of Employment, Interest and Money*, in *The Collected Writings*, vol. VII (塩野谷祐一訳 (1983) 『一般理論』 東洋経済新報社).
- Klein, L. R. (1947), *The Keynesian Revolution*, Macmillan Co. (篠原三代平・宮沢健一訳 (1952) 『ケインズ革命』 有斐閣).
- Laidler, D. E. W. (1999), *Fabricating the Keynesian Revolution: Studies of the Inter-War Literature on Money, the Cycle, and Unemployment*, Cambridge Univ. Press.
- Lavington, F. (1912), Uncertainty in its Relation to the Net Rate of Interest, *Economic Journal*, vol. 22.
- (1925), An Approach to the History of Business Risks, *Economic Journal*, vol. 35.
- Mill, J. S. (1844), Of the Influence of Consumption on Production, in *Collected Works*, vol. IV. Univ. of Toronto Press, 1967.
- (1948), *Principles of Political Economy*, in *Collected Works*, vol. III. Univ. of Toronto, 1965 (末永茂喜訳 (1960), 『経済学原理』 岩波文庫).
- Say, J. B. (1821), *A Treatise on Political Economy*, translated from the 4th ed. by C. R. Prinsep (1880), Rep. Kelly Publishers (1971).
- Sowell, T. (1972), *Say's Law: A Historical Analysis*, Prinstone Univ. Press.